



写真に見る 115年前の長崎

日露戦争時代

姫野 順一

□11□

丸山・寄合の遊郭

上の写真は、貸座敷に姿容した明治30年代の旧丸山遊郭。花月楼（現料亭花月）の前から奥の料亭杉本屋（現料亭青柳方面を撮影）している。

左は南検番の門柱。検番は芸者の稽古や試験を行い、お座敷を手配し、事務所には所属する芸者の名札が掛けられていた。奥は大寿楼、玉島亭、清風楼と貸座敷の3階建てが続く。3階の障子と欄干は遊郭の風情を伝えている。道の奥には芸者の置き屋が並んでいた。

人力車が待機するのは「三検若者屋」と呼ばれた南・東・町三検番の芸者の待合所。その横の黒塀は貸座敷の加島屋である。さらに奥には東検番があった。この建物は今でも長崎検番として芸子衆の事務所に使われている。人力車が走りやすいように道は敷石で舗装され、大きな電柱から電線で電気が送られ、玄関や軒先には紅灯がともされている。長崎では明治26（1893）年から電気が通っていた。

時代と共に変容した花街



寄合町の水遊楼（現丸山公園）から南を望む（長崎外国語大所蔵）

といった貸座敷が軒を並べていた。

花街や花柳界と呼ばれた丸山町と寄合町の入り口（現丸山交番前）には、江戸時代「山門」と呼ばれた二重の「大門」が設けられていた。

明治5（1872）年の太政官布告により遊女は年季拘束から解放され、明治6年の公娼取締規則により遊女屋は公娼と呼ばれる貸座敷に姿を変えた。昭和21（1946）年にGHQ指令で公娼制度は廃止され、昭和32（1957）年に売春防止法が成立して遊廓の歴史は幕を閉じる。

長崎検番の芸子衆は「くんち」の奉納踊りの伝統をひき、丸山芸妓の芸能を守っている。

随時掲載します

（長崎外国語大学長）